

2回目穂肥は確実に施用し、こまめな水管理で 後期栄養を確保しましょう。

【7月8日現在の生育状況】 コシヒカリ（指標値比）

- ◆平坦地 草丈：並、茎数：並、葉数の進み：並、葉色：やや淡い
- ◆中山間地 草丈：並、茎数：多い、葉数の進み：並、葉色：やや淡い
- ◆コシヒカリの出穂期

平年より4日程度早いと予想（平坦地：7/29頃、中山間地：8/3頃、管内平均：7/30頃）

1 出穂予想と穂肥のめやす(7月8日現在)

品 種 名	出 穂 予想日	穂肥施用時期				2回の合計 窒素量 (kg /10a)
		1回目	出穂前 日 数	2回目	出穂前 日 数	
【平坦地】 コシヒカリ	7/29頃	7/11～14頃	18～15	7/19頃	10	2.0
【中山間地】 コシヒカリ	8/3頃	7/16～19頃	18～15	7/24頃	10	2.0
新 之 助	8/8頃	7/18～21頃	21～18	7/27～29頃	12～10	2.0

◎その他品種出穂見込み：五百万石 7/19頃、つきあかり 7/20頃、こしいぶき 7/22頃、
こがねもち 7/27頃

※早生品種（五百万石、つきあかり、こしいぶき）は5月上旬に移植した場合を想定。

※こがねもち、コシヒカリは稚苗5月10～15日頃、中苗5月15～20日頃に移植した場合を想定。

※出穂期は今後の天候等により前後する場合があります。今後の最新情報を参考にしてください。

2 コシヒカリの穂肥診断～診断結果を基に、施用時期及び施用量を判断しましょう。～

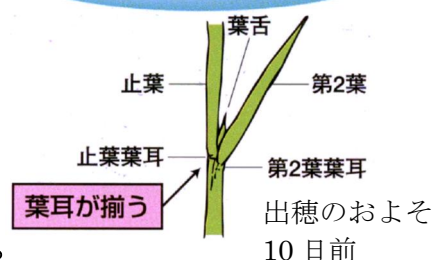
【1回目の穂肥：幼穂形成期（出穂24日前頃）の生育による診断】

葉色(単葉) 草丈	SPAD値 : 34～32 又は 葉色板 : 4.2～3.9	SPAD値 : 35以上 又は 葉色板 : 4.4以上
70～75 cm以内	施用時期・施用量とも基準どおり ■出穂18日前に1.0kg/10a	施用時期を遅らせる ■出穂15日前に1.0kg/10a
75～80 cm以内	施用量を減らす ■出穂18日前に0.5～0.8kg/10a	施用時期を遅らせ、施用量を減らす ■出穂15日前に0.5～0.8kg/10a
80 cm以上	施用できない	施用できない

【2回目の穂肥：出穂12日前頃の葉色による診断】

出穂14日～12日前の葉色	出穂10日前の施用量 (10a当たり)
SPAD値 : 34～32 又は 葉色板 : 4.5～4.2	基準量どおり施用する 1.0～1.5kg/10a
SPAD値 : 35以上 又は 葉色板 : 4.6以上	施用量を減らす 0.7～1.0kg/10a 未満

第2回目の適期診断



○ 2回目穂肥は、後期栄養維持のため確実に施用しましょう。

【3回目穂肥：分施肥体系の出穂直前の葉色が淡く、高温が予想される場合の穂肥めやす】

施用体系（基肥＋穂肥）	判定時期と葉色のめやす	施用時期、施要量
化学肥料＋化学肥料体系 ※3回目も化学肥料	出穂期3日前の葉色（注1）がSPAD値で31以下、又は葉色板で4.0以下の時	出穂期3日前に窒素成分で1kg/10aを上限として施用
有機質肥料＋有機質肥料体系 ※3回目に有機50%肥料を施用	出穂期6日前の葉色（注1）がSPAD値で33以下、又は葉色板で4.4以下の時	出穂期3日前に窒素成分で1kg/10aをめやすに施用

（注1）葉色は単葉測定値

【全量基肥施肥体系】

- 葉色が低下し、出穂期の葉色（SPAD値）が32～33（又は葉色板で4.4）を下回ると予想される場合には、出穂期10日前までに追肥を実施しましょう。
- 有機質肥料を施用する場合は、出穂期3日前より早目に、窒素成分で1kg/10a程度を施用しましょう。
- なお、全量基肥肥料に含まれる緩効性肥料は土壤水分が不足すると窒素成分が溶出しにくくなるので、飽水管理を徹底しましょう。

3 今後の水管理

（1）飽水管理の徹底で稲体の活力を維持

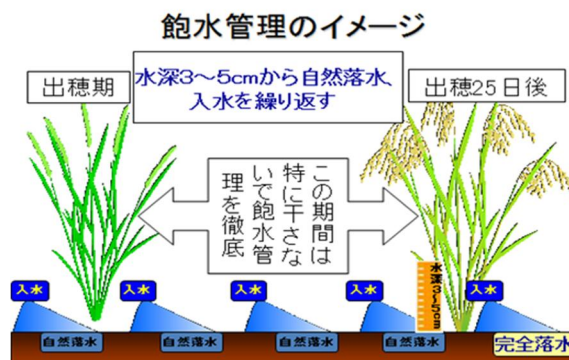
- 飽水管理とは、自然に水が減って田面に水がなくなり、溝や足跡の底に水が溜まっている程度になったら、かん水を繰り返す水管理です。
- 高温下での継続した湛水は、根腐れの発生につながるので水の更新を行いましょう。

（2）完全落水は出穂後25日以降に実施

- 出穂後25日までは飽水管理を継続し、最終かん水を出穂後25日以降に実施します。完全落水はそれ以降としましょう。
- 早期落水は登熟が不良となり、未熟粒等が増加することで品質が低下するとともに、下位葉の枯れ上がりや倒伏が助長されます。
- 登熟期間が高温で経過する場合は、出穂後30日までかん水を行い、品質低下を防ぎましょう。

（3）異常高温、強風フェーン時の水管理

- 異常高温、強風フェーン時は速やかに湛水し、稲体からの急激な蒸散による障害（白穂や着色粒、稈実障害等）の発生を防ぎましょう。
- 湛水深は可能であれば3cm以上（フェーン時に湛水状態が保たれる深さ）としましょう。フェーン通過後は落水し飽水管理に移行します。



4 病虫害防除 ～いもち病の発生、カメムシ類の多発に注意～

- いもち病感染好適条件が出現しています。新之助等のいもち病に弱い品種や、生育量が大きく葉色が濃いほ場及び、過去にいもち病が見られたほ場では、こまめに確認を行い、早期発見・早期防除に努めましょう。
- 例年同様、病虫害発生予察調査では斑点米カメムシ類が確認されており、斑点米被害の多多発生が懸念されます。
- 生息地となる畦畔・農道は、イネの出穂以降もイネ科雑草が出穂・結実する前に除草を行いましょう。また、水田内のヒエやホタルイについても斑点米カメムシ類の増殖場所となるので、本田除草を徹底しましょう。
- 薬剤防除を行う場合は、カメムシの種類や薬剤により散布適期が異なりますので注意しましょう。

お問い合わせ：上越東農林事務所 普及課 作物担当
TEL：025-592-3848 FAX：025-592-3591